

## キング・ノナカの生涯を通して見た日墨近代化協力の歩み

有村, 理恵  
メキシコ国立自治大学モレリア校美術史学科 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/2236685>

---

出版情報 : 決断科学. 6, pp.91-99, 2019-03-23. Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## キング・ノナカの生涯を通して見た 日墨近代化協力の歩み

有村理恵   メキシコ国立自治大学モレリア校美術史学科准教授

「メキシコ革命に生きたサムライ」という見出しの『エル・ユニベルサル』紙の記事（2015年5月16日付）により、私は、ホセ・ヘナロ・キング・ノナカ（野中金吾、1889年12月2日 - 1977年10月8日）という福岡県出身移民の存在を知った。<sup>1</sup>ノナカは、1906年、16歳で渡墨。しかし、1910年、ディアス独裁政権打倒と民主主義を目指したメキシコ革命勃発による社会混乱の中、看護師・軍医として活動する傍ら、革命指導者であるマデロ率いる軍「マデリスタ」にて二回、そして、ビリャが編成した「北部師団 División del Norte」にて十二回交戦。後にその功績が評価され、1967年9月6日、グスタボ・ディアス・オルダス大統領臨席式典にて、当時防衛大臣であったマルセリーノ・ガルシア・バラガンから大尉勲章を受章（図1）。同記事は、キングが晩年自ら綴った回想録『Kingo Nonaka: Andanzas revolucionarias キング・ノナカー革命期の足跡』が、その息子ヘナロ・ノナカ・ガルシアとティファナ歴史資料館館長ホセ・リベラ・デルガドにより編纂されたことを報じるものであった。

---

1 José Juan de Ávila (2015) を参照。



図1 ディアス・オルダス大統領から祝福を受けるキング・ノナカ  
(メキシコシティ、1967年9月6日) ティファナ歴史資料館写真室所蔵

キングの軌跡をたどり、私は、ヘナロ・ノナカ氏の住むバハカリフィルニア州ティファナを訪ねた。そこで目にしたのは、写真家としてのキングの活躍であった(図2)。革命終了後の1921年、新しい可能性を求めて、国境の町として賑わっていたティファナにノナカは生活の拠点を移す。当時、同町は、米国の禁酒法の反動により、多くのアメリカ人がメキシコ側のカジノを訪れ、目覚ましい経済発展のまっただ中にあった。1941年12月太平洋戦争勃発に伴い、その翌年、日本人移民強制転住の命令が下され、メキシコシティへの転居を強いられるまでの二十年間、ノナカは、ティファナ初の写真家として、町並みや人々の暮らし、日本人移民コミュニティなどをカメラに収めたのである。ノナカの功績は多岐にわたり、刑事、国立心臓病学研究所創設者でもあった他、フリーメーソン団員として数々の慈善活動に参加した。本稿では、渡墨から革命期までのノナカの流転の半生に焦点を当てながら、二十世紀初頭、メキシコに移住した日本人たちを取り巻いていた環境、そして、数々の逆境を乗り越えて人生を切り開き、歴史上、移民たちが残した業績の意義について考えてみたい。



図2 ティファナ市のパノラマ写真  
(キング・ノナカ撮影、1924年) ティファナ歴史資料館所蔵

## メキシコ移住から耕地入植・逃亡まで

キンゴ・ノナカは、父ブンシシ、母タツヨと7人兄弟の家庭に育つ。経済的貧困のため、メキシコへの移住を決心し、1906年、伯父シオタロウと長男エンクロウと共にハワイとメキシコ（サリーナ・クルス港）経由のパナマ行きの船に上船する。しかし、乗船中、エンクロウは胃炎を起こし、ハワイの病院で治療してから帰国するという船長指示に従い、兄のみ下船。（エンクロウは、その後、帰郷せず、ハワイにて移民としての人生を送る。）

キンゴは伯父と共に船旅を続け、同年12月30日、メキシコ、オアハカ州のサリーナ・クルス港に上陸する。その後、二人は、当時、千人以上の日本人移民が労働していたベラクルス州サンタ・ルクレシアのサトウキビ耕地「ラ・オアハケーニャ」に入植する。<sup>2</sup>同アシエンダは、一万六千ヘクタール以上の面積を持つ大農園で熱帯森林に囲まれていた。移民会社が発行している募集パンフレットでは「気候も環境も良し」とされていたが、実際は、気温40度を超える猛暑の中、苛酷な労働を強いられていた。また、その地域ではマラリアが蔓延していた他、衛生環境の不備から腸チフスに感染し、命を落とす移民も少なくなかった。「ラ・オアハケーニャ」では、毎日、二、三人の労働者が犠牲になっており、ひどい時は、一日で十六人死亡したと報告されることすらあった。<sup>3</sup>キンゴの伯父シオタロウもマラリアにより、入植わずか一ヶ月半後、死去する。同農園の劣悪な労働条件から脱却するため、キンゴをはじめとする数多くの日本人移民は、より生活環境が整っていたアメリカ合衆国へ移住することを目指し逃亡する。

十九世紀末、榎本武揚により提案された元来の日本人メキシコ殖民構想は、日墨両国の相互利益に基づいた国家的事業という理念に基づいていた。日本側にとっては、「海外殖民事業を急増する国内人口問題の解消策と位置づけ、「殖民」として合法的に日本人を海外に送り出し、海外在留邦人

2 Genaro Nonaka García (2014) 14-15 頁を参照。

3 Emma Mendoza Martínez (2011) を参照。

と本国の貿易を促進させ、究極的に日本の産業を振興させる」という意図があった。その一方で、メキシコ側は、ディアス政権下、押し進められていた鉱山開発、鉄道建設、農地における労働者不足問題を解消する策として、勤勉さで評価の高い東洋系移民の移住政策を奨励していた。とりわけ、1897年に渡墨した「榎本殖民」の場合、チアパスの拓殖政策、コーヒー産業振興策、およびグアテマラとの国境画定問題への対応というディアス政権の国策の一環として実践された。<sup>4</sup>

しかし、その後の日本人移民の大半は、メキシコに留まるのではなく、賃金が高く、労働条件の整っていた米国に最終的に入植することを目標と掲げていた。事実、1900年から1910年までの間に一万人以上の日本人移民が渡墨したが、メキシコ国内に残ったのは、その四分の一だと見積もられている。では、多くの移民たちはどこへ行ったのだろうか。それは、アメリカとの国境に位置するチワワ州シウダー・ファレスであった。<sup>5</sup> キンゴもその例外ではなく、アメリカ入国を目指し、鉄道線路に添って三ヶ月歩いた末、同町にたどり着いたのである。<sup>6</sup>

しかし、急速に移り行く時代の流れは、米国移住を希望する日本人労働者の思いに届かなかった。日露戦争（1904～1905年）後、慢性的な不況に陥った日本は、失業者問題解消策として海外労働移動を促進した。しかし、北米（とりわけ西海岸地域）での日本人移民急増が、アメリカでの排日運動に拍車をかけたのだ。その対応として、1908年、日米紳士協約が締結され、日本政府は、米国且つその隣国カナダ、メキシコへの日本人労働者派遣を制限することを約束した。<sup>7</sup> そうして、ノナカをはじめとする多くの在墨日本人移民は、アメリカへの国境を越えることができず、メキシコに留まることになる。

ノナカは、シウダー・ファレスに着いた当初、言葉も分からず、行き先もなく、公園のベンチで寝泊まりしていた。そんなある日のこと、早朝のミサに参列するため、教会に通っていたビビアナ・カルドンという婦人が、

4 柳沼孝一郎（1999）を参照。

5 Jerry García (2014) 4 頁； Héctor Palacios (2012), 121, 129 頁を参照。

6 Genaro Nonaka García (2014) 16 頁を参照。

7 Héctor Palacios (2012) 129 頁を参照。

公園でキングを見かける。背が低く栄養不足で痩せ細っていたため未成年だと思い、カルドン家の養子として迎え入れた。ノナカは、婦人から言語やメキシコの習慣を学び、ホセ・ヘナロという名前で洗礼を受ける。

## メキシコ革命の流れの中で

1910年11月20日、北部コアウイラ州出身のフランシスコ・マデロにより、三十年におよぶディアス独裁政権を打倒し、民主主義を推し量るため、革命の波がメキシコ全土に広がっていった。そういう社会変革の中、ノナカも人生の転換期を迎える。カルドン家の養子になって以後、その家業であった家畜飼料の倉庫管理を手伝い、自己所有の倉庫を経営するに至ったが、革命の嵐により、それらの飼料倉庫は荒らされてしまう。

シウダー・ファレス市民軍事病院で看護長として勤務していたビビアナ婦人は、仕事を失ったキングを職場に連れて行くようになる。病院には、患者たちが散歩、リハビリ、日光浴をするために使用していた中庭があったが、菓子のクズやゴミで汚れていたので、キングは自ら進んで掃除を始めた。その姿を観察していた病院事務長のカラスコ医師は、キングが来院するようになってから、中庭がきれいになったと喜び、清掃士として月に七ペソ支払うようになる。ノナカが掃除を担当する場所は、徐々に診療室、病棟と広がっていき、手術室での特殊清掃の手順を学ぶと同時に、看護師たちの仕事を見て覚えた。そうして、1909年10月4日、看護師助手に昇格し、月給二十五ペソとなり、その約一年後の1910年12月2日には、看護師の資格を取得し、月給も七十五ペソに上がる。<sup>8</sup>

冒頭で述べたように、革命期、ノナカは、マデロとビリャが指揮する部隊にて、軍医として戦場を駆け巡り、一人でも多くの命を救うことに全力を尽くしたわけだが、どのように、時の権力者マデロと知り合い、信頼関係を築くに至ったのであろうか。1911年3月6日、メキシコ北部チワワ州カサス・グランデスでの銃撃戦にて、革命軍はアグスティン・バルデス率いる政府軍に敗北し、マデロは右手を負傷する。たまたまその時、ノ

8 Genaro Nonaka García (2014) 18-22 頁を参照。

ナカは、カサス・グランデスで農園を営んでいた代父リカルド・ナカムラの招待を受けて、同家で休暇を取っていた。傷口からの出血がひどいマデロに付き添った男が、ナカムラ家の門を叩き、「消毒用アルコールがないか」と尋ねて来た。ノナカは、負傷した将校が誰かも知らずに、素早く手当てを施した。

傷の処置が終わった後、マデロはお礼を言い、治療代として10ドル支払おうとした。しかし、ノナカは、けが人を手当てするのは自分の務めだからとお金を受け取ろうとはしなかった。そうすると、将校はこう言ったのである。「治療費を受け取ってくれぬか。それに、貴方には、我々と共に来ていただきたい。わが軍の医師になってくださらないか。」ノナカは、シウダー・ファレス市民軍事病院の仕事があるからと断ったが、「我々の祖国が必要としているのは、貴方のような人材なんだ。」というマデロの言葉に心を動かされ、軍医として前線に赴くことになった。革命勃発以降、シウダー・ファレスの医師の多くは、テキサス州エル・パソに逃亡し、薬品不足も深刻な問題となっていた。そういう困難な状況の中、ノナカは看護軍団を編成し、戦傷者のために献身したのである。<sup>9</sup>

ノナカと強い絆を育んだマデロは、日本人に対し親近感と信頼感を持ち、そのことが当時の日墨外交にも反映される。1911年ディアス追放後、大統領に就任したマデロは、駐墨公使堀口九萬一と親交を深めた。1913年2月9日、「悲劇の十日間」と呼ばれるウエルタ首謀の反革命クーデターが発生し、マデロが暗殺された折、堀口はその親族三十余名を保護し、日本公使館に避難させた。その堀口の偉業を、田中浅次郎（ノナカ同様、福岡県出身の移民で、マデロが大統領就任時、大統領官邸専属料理人を務める）は、このように証言している。

ウエルタ軍が押し寄せて「マデロの家族匿ひある由早速引渡しさ  
れたい。もしこちらの要求を容れない時は暴力の止む無きに至るや  
も知れぬ」と無茶な威嚇をした。しかし、公使はそんな言葉は鼻で突っ  
て、玄關に日の丸の旗を敷き広げ、「日本帝国公使館だ！貴国軍隊の

9 Genaro Nonaka García (2014) 29-31, 37 頁を参照。

侵入は許されないそれでも押しと言われるならば、御自由にさる  
がいい。だが入る前にこの国旗に土足をかけたら由々しい国際問題  
が起こるぞ」といって入り口に立はだかったので、ウエルタ軍はい  
かんともする事ができず・・・<sup>10</sup>

## 結びに

1821年にスペインから独立し、その後、カウディージョ時代、フランス干渉戦争を経て、1867年、ファレス大統領により共和制を樹立させたメキシコ。日本とほぼ同時期に近代化を開始させたことは、『決断科学』第2号にて矢原徹一博士がすでに指摘している。欧米列強の軍事的・経済的圧力に対抗するため、日本とメキシコの両国は、1888年の日墨修好通商航海条約調印により国交を回復させ、近代化協力のパートナーとして共に政策を押し進めた。事実、同条約は、米国のペリー総督来航以降、不平等条約締結を強いられていた明治政府が、最初に結んだ平等条約であり、日本にとって、西洋諸国との平等な外交関係をめざして再交渉、再提起するための貴重な先例となる。

日本人のメキシコ殖民事業は、同条約と連結した両国の社会・経済発展をかけた国家的プロジェクトであり、その枠組みの中で、1897年、「榎本殖民」はチアパス州エスクイントウラに入植した。しかし、急速な時代の流れにより、ノナカが渡墨した1906年には、大半の日本人移民にとって、メキシコはアメリカに入国するための「通り道」でしかなかった。しかし、日露戦争後、米国での排日運動の高まり、1908年、北米への日本人労働者派遣を制限した日米紳士協約が結ばれた結果、アメリカの国境を越えることができなかつた在墨日本人移民。その多くは、メキシコ革命という激動の時代の中で、第二の祖国と運命を共にし、互いに支え合つたのである。二十世紀のメキシコ史、日墨関係史の中で、ノナカをはじめとする日本人移民が果たした役割を今後より認識・評価していくことが大切と言えよう。

---

10 田辺厚子（1997）21頁を参照。



## 参考文献

- Ávila, José Juan de (2015), "Un samurái en la Revolución Mexicana", *El Universal*, 16 de mayo de 2015. <http://archivo.eluniversal.com.mx/cultura/2015/un-samurai-en-la-revolucion-mexicana-1100398.html>
- García, Jerry (2014), *Looking Like the Enemy: Japanese Mexicans, the Mexican State, and US Hegemony, 1897-1945*. Tucson: The University of Arizona Press
- Mendoza Martínez, Emma (2011), "Migración okinawense al sur de Veracruz, México, principios del siglo XX", *Asociación Latinoamericana de Estudios de Asia y África. Memorias del XIII Congreso Internacional*, Bogotá, Colombia, 23-25 de marzo de 2011. [http://ceaa.colmex.mx/aladaa/memoria\\_xiii\\_congreso\\_internacional/images/mendoza\\_emma.pdf](http://ceaa.colmex.mx/aladaa/memoria_xiii_congreso_internacional/images/mendoza_emma.pdf)
- Nonaka García, Genero (Comp.) (2014), *Kingo Nonaka: Andanzas revolucionarias*. Mexicali: Artificios.
- Palacios, Héctor (2012), "Japón y México: el inicio de sus relaciones y la inmigración japonesa durante el Porfiriato", *México y la Cuenca del Pacífico*, versión electrónica, núm. 1, pp. 105-140. <http://www.mexicoylacuencadelpacifico.cucsh.udg.mx/digital/1>
- 田辺厚子（編）（1997）『メキシコ文化に残された日本人の足跡』Tijuana: El Colegio de la Frontera Norte
- 柳沼孝一郎（1999）「ディアス政権の産業振興・殖民政策と日本人移民：メキシコのコーヒー産業と日本人殖民構想の史的背景」『ラテン・アメリカ論集』33号 <http://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3506539>



有村理恵 ありむら りえ

メキシコ国立自治大学モレリア校美術史学科准教授

研究領域：メキシコ・コロニアル建築・美術（16世紀）、南蛮美術。  
メキシコ国立自治大学哲文学部大学院美術史専攻博士課程修了。鹿児島市生まれ。